

非暴力社会変革をめざす

フィラデルフィア・ライフ・センターの活動

クリストファー・モア

新たな運動の誕生

一九六〇年代の中頃におけるベトナム戦争の強化にともなう、クエーカーの宗教的平和主義者のグループは、クエーカー行動集団（A Q A G）を組織した。このグループは、インドシナ半島におけるアメリカ政府の蛮行に対する徹底的な反対をするために作られたものである。

A Q A Gの最初のキャンペーンは、首都ワシントンにおいて、戦没者たちの名まえを読みあげたことだった。政府は、参加者全員を捕逮し、彼らを監獄に送りこむことによって

これに対応した。だが、キャンペーンが進むにしたがって、抗議する人々の数もふえていった。上院と下院の議員たちも、この抗議運動に参加したのである。運動参加者の逮捕は、連邦裁判所が首都におけるこれら一連の非暴力による示威行動は合法であると表明するまで続いた。抗議行動はエスカレートし、人々は主要な官庁の建物のまえでも戦没者たちの名まえを読みあげることをはじめた。

一九六七年になってA Q A Gは、人道的な連帯という立場から、南北両ベトナムへ医療品を送ることに決定した。医療品は、小さな帆船「フェニックス号」で送られることになった。この航海の目的は、戦争とは何かをアメリカ社会の前に明らかにすることであり、

南北両ベトナム人民に対して医療品を寄贈することだった。

敵対関係にある国家とのあいだの交易に関する合衆国の法律を全く無視したクエーカーのこれらの行動は、アメリカ政府をジレンマにおとし入れた。もし彼らが船を阻止しようとするならば、彼らは戦争遂行政策が、人道的で民主的な主張といかに矛盾しあうものであるかをさらけ出すことになるだろう。航海を阻止することは、アジア人民の苦しみに対して政府がいかに無感覚であるかを明らかにすることになるのだ。そして、船が南北ベトナムに向かうことになれば、この行動は、アメリカ人の一部がベトナム戦争政策を支持してはいないのだということを世界に示すこ

とになるだろうし、医療品は負傷者の治療に役立つことになるだろう。このアメリカの運動は、共通の目標であるベトナム解放の運動に結びつけられるだろう。

決断の時がおとすれたとき、合衆国政府はフエニックス号の北ベトナムへの航海を許可した。南ベトナムへの第二回目の航海のときには、政府はクエーカー教徒のサイゴンへの上陸を妨げた。クエーカーのこうした非協力の行動は、合衆国とカナダにおいて広く報道されることとなった。多くのアメリカ人は、合衆国の蛮行のために苦しんでいる人々がいるということに突然気づいたのだった。

その他のA Q A Gのキャンペーンには、ラテンアメリカにおける合衆国軍隊の行動に反対するパナマでの抗議行動などもあった。それは、化学・生物兵器の使用に反対するものであり、合衆国軍隊をアエルトリコとクレブラから撤退させるためのアエルトリコ人と共同のキャンペーンであった。

一九七一年春、海軍省はクレブラにおける休戦を伝えた。クエーカー行動集団は、キャンペーンを終え、クレブラにおける彼らの果たした役割の評価と、組織それ自体の有効性に対する一般的な評価とを行なった。いくつ

かのキャンペーンにおける成功にもかかわらず、組織における矛盾に気づいたのである。

それは、例えば次のような点においてみられた。まず、我々が変革したいと望んでいる社会制度のなかでみられるような官僚的な決定の過程や、運動内部における男性と女性のあいだの仕事の差別といった点。あるいは、朝の九時から夕方の五時まで社会変革の仕事に従事する時間と家庭における時間のあいだの違いとでもいったもの、そして我々の社会変革の努力に対するまわりからの一般的な支援の欠除等である。だから、我々は再編成の必要があると感じた。

このときに、その年の最初から仕事を開始したグループが、新しい組織「新しい社会のための運動」(MNS)を提案した。彼らのビジョンとは、異なった分野で社会変革のために仕事をしている多くのグループから成るコミュニティを創ることであった。彼らは、これらの人々がひとつのコミュニティにしっかりと住むことを望んだ。そして、個人的なレベルから社会的なレベルに至るまで、共に力を合わせて社会変革に貢献することを望んだ。この提案は受け入れられ、A Q A Gは解散し、「新しい社会のための運動」を創っていくこ

とになった。

直接行動とコミュニティの結合

過去何年間かのあいだ、アメリカにおいても日本においても、社会変革のための戦略が求められるべきであるという論争がつづいてきた。あるグループは、この社会から全く身をひいて、それに代わるべき制度と新しい生き方を創造するために努力を集中しようとする張した。このグループは、合衆国において最近のコミュニティ運動の先頭に立った。他のグループは、社会から脱落することはアメリカの社会と政治とを根本的に変革することにはならないだろうと感じた。それ故、人間の解放をさまたげようとする社会制度と政府とに対して、直接行動で答えることを主張した。

「新しい社会のための運動」のメンバーたちは、これらのどちらのグループとも、非暴力社会革命を達成するための担い手となるに欠かすことのできない認識力をそなえていると感じた。この社会の秩序に挑戦するために、直接行動に立ち上がることは重要である。だがそれと同じように、この社会にとつてかわ

る新しい生き方と制度とを作り上げることも重要であった。我々は、この両者がお互いに補強しあうものだと感じた。新しい社会と制度とを建設していくことは、古い社会の抑圧された生活に代わるものがあるのだということと人々に示すために必要であった。

ライフ・センターは、「新しい社会のための運動」を支えていく共同生活体である。それは、ペンシルヴァニア州フィラデルフィア市における八つのコミュニティの連合体である。我々は意識的に、都市にこれを建設することにした。なぜならば、我々が挑戦したいと望んでいる権力組織、諸制度、諸問題が都市部においてあらわれていると感じたからである。だがこのことは決して、我々が地方の問題を重要視していないということではない。我々の中には、田舎で働いている何人かのメンバーがいるし、田舎でライフ・センターを建設するための用地をあちこちで捜している。だが我々には、我々の社会の中心的な問題は都市の中でみられると思う。だから、我々は都市に在るのだ。

長いこと計画し、無利子のローンを集め、用地捜しをしたあと、一九七一年の春に「新しい社会のための運動」のライフ・センター

はスタートした。我々は最後に、中産階級の下層の人々が住んでいるあたりに腰をおちつけた。そしてここに八軒の家を買ったり貸りたりした。

ライフ・センターの建物の多くは、ライフ・センター公益法人の所有になり、我々はこの法人の構成員である。法人組織というのは、合衆国においては、共同所有の方法として手頃である。たとえば、我々のうちのだれかが非暴力直接行動を行ない逮捕されて、罰金を支払うために財産が差押えられるようなことが起こるのに対抗するためにも、この方法がとても良いのである。

それぞれの家は、そのコミュニティの構成メンバーの同意にもとづいて自主的に管理され、その家でだけ適用される決定をする。ライフ・センターの中で生活様式の相違がみられることは、それぞれの家が自由によつていことを証明している。これらの家々が共同していくべき共通の目的は次のようなものだろう。——まず非暴力による個人的な生活様式の創造。それから、我々を自由な人間であることから妨げている男と女の固定したそれぞれの役割意識に代わるものを見つけたために闘うこと。この共同体のすべてのメンバーへの

心からの支持の気持を育てること。そして、社会制度の変革への献身、である。それぞれの家のメンバーたちとライフ・センター社会とは常にお互いに学びあうので、我々はいっしょに自分自身を成長させることができる。すべてのメンバーは、食事の準備、部屋の清掃、子供の世話、そして共同体の収入を得ることを等しく要求される。日々の生活においては、男性と女性の役割の差別といったものを排除することを試みている。

共同体の生活は、老人と子供がいて完全なものとなる。我々は、それぞれの世代から学ぶものがたくさんあると感じる。我々の社会での年齢の範囲は、九カ月から六七才までに及び、独身者も、夫婦も、家族持ちもいる。

非暴力による社会変革を求める我々は、政府がベトナム戦争遂行のために利用している電話使用料の一〇％税を支払うことを拒否した。他の人々は、所得税の支払いを拒否し、あるいは課税対象となるだけお金をもうけたりすることを拒否し、戦争税を払う必要のないようにしている。こうした人々は、財産差押えの危険を犯し、軍国主義に反対する証言をするために監獄に入る危険を犯す。

収入は、外部でのパートタイムの仕事から

得られる。社会変革が我々の目的であると考えて以来、我々は一週間に三日だけお金のために働いている。我々は外部での仕事をあえて選んだ。なぜなら、我々の社会が成長していくためには、外部社会とのコンタクトを持つことが大切だと感じたからだ。仕事のうえでの人間関係は、我々が運動で接触する人々と同時に、我々の社会変革にとって重要である。人々を変革したいなら、彼らを理解しなければならぬ。人々とともに働くことは、彼らを理解するためにより方法である。

ライフ・センターの活動

ライフ・センターにおける八つの家は、それぞれ代表を出して運営会議をおこない、全体の運営について話し合う。会議への代表は毎月変わるようになっており、それによってコミュニティの全員が共同決定に参加できるのである。また、この運営会議には、いくつかの労働グループと非暴力革命グループ（NRG）からも代表が参加するので、まさに労働者の会議といえることができる。

ライフ・センターは、革命について学び、

針を立て、我々は今、実験をしている。

コミュニティは教派的ではないし、ほとんどのメンバーがひとつの教会に所属しているというわけでもないけれども、大部分の人々は、コミュニティのもっとも大きな建物である「石の家」での週に一度の沈黙の礼拝と黙想に参加する。そのあとで、我々はいろくせの食物で夕食をとり、それから一時間ほどフォークソングを歌う。夜おそくなってから多くの家々では、礼拝やその週の仕事の分担のためのミーティングがある。こうしたミーティングは、コミュニティの精神と生活に与ってとても大切なものである。

ライフ・センターは、我々自身を、我々のまわりにいる隣人たちと一体化し、我々の隣人に社会変革を理解してもらおうと試みた。我々は野菜を作り、毎週安い値段で食料品を我々自身の家々と隣人たちとに供給する生産消費組合を作った。この協同組合は、人々と会ったり考えを交わしたりするためのもっともよい方法のひとつだった。

我々のコミュニティが位置している付近は、都市の他の部分に比較して高い犯罪率を示している。そして、人々や財産に対してなされる犯行の多くは若いギャングたちによるもの

それを実践するチャンスを得る社会変革のための大学でもある。一九七一年から七二年にかけてのクラスには、次のようなものが含まれていた。「現代アメリカの権力」「組織化のための技術」「現代の社会問題」「もうひとつの社会」「コミュニティにおける平等の組織化」「コミュニティの生存と繁栄」「非暴力革命」「価値転換のための方法」「集団力学」「男性と女性の役割」などである。各クラスは一般に三ヶ月間つづき、教育の内容と方法は、グループの目的と必要性に応じて参加者と経験を積んだ助言者の手によって立案される。我々の教育の方法は、ブラジルの教育者パウロ・フレイヤーのそれにきわめて近いものである。我々は、グループの目標と見込みとをはっきりさせ、それから問題を提示して、カリキュラムを作りあげる。

ライフ・センターの内部において、我々は二つの商売をしている。そしてそれは、お客によろこばれるように、利潤本位でなく経営している。それは、紙類やゴム印などの文房具の店と、運動のために安く印刷を引きうける印刷所である。

ライフ・センターは、新しい社会のためのモデルとなることのできるような制度をつく

だった。この地域から犯罪を排除しようとして、我々は隣人たちを集めて話し合いの場を組織した。そして、隣人たちはお互いに知り合うようになった。我々は街頭で安全にいくつかの非暴力訓練を行なった。我々は夜、街頭をパトロールするための非暴力警察隊を組織した。このグループは、人々をふつ々の警察が扱うようには扱わないだろうが、犯罪を消滅させるだろう。人々が街の監視をするならば犯罪はすくなくなるだろう。年をとった人たちは、彼らの家の窓の外を監視するために、彼らの時間の幾分かをさき、なにか問題が起こればコミュニティの警察に通知する。

ライフ・センターの中の他の二つのグループは、将来、近所の人々に対してもっと直接的な奉仕をすることになるだろう。現在でも大工のグループは安い費用で近隣の家々のベンをキをぬったり、修繕したりする。サルベージのグループは、取り去ることになっている建築物をとりこわす権利を得て、まだ使えそうなものどか売れそうなものどかを持つてくる。これは、非常に堅実な、そしてまた有益な仕事でもある。こうした物のあるものは、コミュニティや近隣の家々の修理のために使用される。これらの二つのグループは、

ることをめざしている。何人かの我々の友人の医者コミュニティ内の看護婦によって作られている診療所は、コミュニティにおけるもっとも重要なもののひとつである。メンバーは、すばらしく安い費用で治療をうけることができる。新しい社会において、すべての人は、必要な治療を自由に受けることができることを我々は望んでいる。ライフ・センターのすべての活動においてみられるように、我々は他人の世話になったり、他のものを補ったりすることなく自分たちだけで充足できることを非常に大切なことだと考えている。こうして看護婦は、我々の世話もするが同時に我々に医学を教える。

我々のもっとも最近の実験のひとつは、協同健康保険の計画だった。合衆国においては、保険金は非常に高く、それは大会社である保険会社から買わねばならない。これらの会社は間接的に大きな株式会社や銀行と結びついていて、投機的な性格を帯びており、そうしたあり方に我々非暴力革命を旨とする者は賛成することができない。だから、我々は何か他の保険制度を創りだすことが大切だろうと感じたのである。必要な時にはいつでもお互いに経済的に助けあうことを約束するという方

安全な家で健康に生活する上で人々を助けたいし、こうしたことから、隣人たちに対する本当の関係が生まれてくるのである。

社会変革のキャンペーン

ライフ・センターの主要な目標のひとつは、制度（政治）のレベルと社会のレベルにおける非暴力社会変革である。我々は、我々の非暴力革命集団（NRG）と訓練グループとによってこの目的に達しようと努力している。NRGとは、ひとつの一定の地域に社会変革の焦点をあわせることに同意した人々の小さなグループである。ライフ・センターには、たくさんあるNRGのグループがあつて、これらの小さな行動グループは、人々の必要に応じてアメリカ国内どこへでも現われる。

ライフ・センターで急進的な教育に関する仕事をしているNRGのグループは、去年、二つの高校において非暴力社会変革についての講座をもった。そこでは、新しいカリキュラムと学校組織について究明し、小学校においては簡単な手仕事を教えたりした。又、一九七一年に、バンクラデッシュにお

いて戦争が起ったときには、合衆国の西バキスタンへの兵器の積出しを阻止するために、キャンペーンを行なった。ライフ・センターは、東海岸に武器を積んだ船が接岸するのを妨げるために、小さなボートを用いて非暴力による海上封鎖の戦術を試みてみた。我々はまた東海岸のドックで働く労働者たちの組合がストライキを打ち、パキスタン向けの船に兵器を積まないことを確信した。このキャンペーンはとてもうまくいき、合衆国が罪のないベنگガル人を殺すための軍需物資を送ることを防いだ。そしてこのことは合衆国政府がしばしば独裁者に対して援助しているのだということアメリカ市民のまえに明らかにした。

このグループは同じようにして、ベトナム向けの武器の輸送を妨げるために、非暴力による海上封鎖を行なった。我々の小さなコミュニティは、ニュージャージーの港で最初の行動を開始した。そして今、他の仲間たちはこのキャンペーンを拡大しており、港は西と東の両海岸で封鎖されている。キャンペーンが広がっていくにつれて、我々はそれが、報道機関に訴えかけ我々の主張を広めるために効果のある方法だということを見出した。小

さなボートが、ベトナム行きの武器を積んだ船を阻止することは、非常に明確に訴えかけるものをもった行為であり、これは又、他のグループによっても同様のことをなしようということも示している。

ライフ・センターは最近になって、合衆国において最大規模の軍需物資を生産しているジェネラル・エレクトロニクスに対するキャンペーンを開始した。合衆国の最も大きな平和グループの多くを連合させたこのキャンペーンは、最近五年間にわたって続いている。我々の目的は、この会社の軍需生産を終わらせ、それをより人間的な責任にもとづいた組織に変えることである。このキャンペーンにおけるもつとも効果的な手段は、ベトナムで使われている自動操作による武器等に関するスライド・ショウであった。

短期訓練グループは発展し、アメリカ、オランダ、イギリス、アイルランド、ノルウェー、そしてデンマークにおいて、非暴力社会変革についての多くの訓練セミナーを組織した。日本においては、二人のトレーナーが、二カ月にわたって訓練のためのセミナーを行っている。我々が重点をおくことは、非暴力の方式を人々に訓練することであり、それ

によって、人々は社会変革にむかって彼ら自身のプログラムを発展させてゆける。

経済分析のグループは、現代アメリカの権力、帝国主義と彼らの世界関係、生態学、そして代わるべき社会といった課題を含んだ社会変革のための経済について、いくつかのコースのセミナーをあつかった。

「新しい社会のための運動」のメンバーは、社会変革のために多様な生活様式を含んだ全国的な非暴力運動を建設することを欲している。アメリカ全土において、NRGを組織するための我々の努力は非常に成功したといえる。2つの他のライフ・センターがワイスコンシン州のマディソンとデンバーコロラドに作られ、第三番目のものがアイルランドのデリーに建設されている。

我々は、人間解放と非暴力社会変革を旨ざしているあらゆる世界のグループと関係を発展させていくことを望んでいる。我々は、文通、訪問者、社会変革をめざす学生、そして革命的な共同体を建設することに関心をもっている人々のすべてを歓迎する。

The Life Center/ Movement for a New Society 1006s. 46th. st. Philadelphia, Pennsylvania 19143, U.S.A.

第10回キブツ研修生合宿報告

雨の中の合宿

金峰農場は標高一五〇メートルで、他の部落からはなれたところにあります。バスの終点塩平からさらに歩いて一時間半あまり、曲がりくねった林道を歩いて、ようやくめざすS C I金峰トレーニングセンターに到着します。

9月14日から17日にわたって行なわれた参加者24名のキブツ研修生の合宿はここを会場としました。バスを降りて歩きはじめたとたんに雨に降られ、がんばって到着したときはすでにびしょぬれでした。ちょうど台風の通過を山の上ですごしたようなもので、二日予定していた労働も果たせず、残念でした。

雨に打たれて共に歩いてきたおかげか、着いたときはすでにみんなお互いに仲良くなっていたようです。それに静かな山の中で気を散らすこともないままに、3泊4日という短い期間でしたが、一緒に生活したことは参加した研修生の間に非常な親しみ

を呼び起こしたようです。この意味では国内研修の目的は一応達成されました。

中東をめぐる情勢の流動性のため、この合宿でも情勢の予測、実施できるかどうかという点がひとつの中心になりました。不安定ながら、研修生が行けなくなるような戦闘の拡大はないであろうという手塚さん

の分析があり、研修生は安心してさあ行くという気運が盛り上がりました。

各参加者の紹介に「他己紹介」などの方法を使い、小グループ制をとり、雨にふりこめられた屋内でみんな熱心に万般の問題について話はずみしました。共通点も勿論ありますが、むしろ異質な人間たちが集まって生活し、話しあうことの楽しさ、苦しさそれぞれの人を感じたようです。

感想の中で述べられていたように、キブツというものが、共同体というものについての参加者の自覚が徐々に喚起されてきた気配がします。そして、各人の生き方と、当面の目標、キブツで生活することの結びつきについてみな考えさせられたのは、S C Iトレーニンングセンター在住の小林茂夫さんの話からでした。3年余の金峰開拓で身体を使つての農業労働からにじみ出る実践の言葉に、多くの人が感銘を受けました。出発予定の10月下旬あるいは11月上旬に向かつて、これから準備を整えてゆくのですが、持ち物ばかりでなく、各参加者の姿勢のあり方、グループのあり方、キブツのあり方についておおいに考え、論じあってもらいたいものです。(百瀬記)



新しい農村指導者の雑誌

地上

B5判 ● 定価140円(通常月号)



激動の'70年代を乗り切るため 農協役員、農業経営者は

全員読もう

正確な情報 / 正しい分析による

重点特集

● 3つの重点ポイント

農業・農政の問題点をつく

農協のあるべき姿を追求する

生産と販売戦略の方向をさぐる

お申し込みは農協へ

協会日誌

8月17日 フィラデルフィアライフ・センターという共同生活を拠点にして非暴力社会変革運動の活動をしているクエーカーグループの一員であるクリストファー・モア氏がくる。

8月18日 共同体研究会で小長井春雄君が「管理社会における共同体志向——やさしさと日本社会」というテーマで話す。

8月20日 第10回キブツ研修生の選考会が東京の家の光会館でおこなわれ、約40人の中から二五人が研修生として選ばれる。

8月25日 第一次カブリ・グループの定森正治君くる。この春結婚して、近く子供もうまれるとのこと。

8月26日～28日 埼玉県の新しき村で第五回日本の共同体話し合いの会が開かれる。今回の会合は参加者も多く盛会だった。

9月1日 月刊キブツ九月号発行。

9月5日 河内共同養鶏実顕農場の木村弘氏がきて、有精卵や無公害野菜などをめぐって消費者との結びつきが進展しつつあることを話してくれる。

ドイツのミュンヘンのオリンピック選手村で、イスラエルの選手団がパレスチナゲリラの人間質になり、その後空港で全員が殺されるといふ事件がおきる。

キブツ・ギネガールから帰って小諸学舎という精薄施設で働いていた水野正行君がくる。

9月6日 厚木振出塾の井出君、西川さんくす。

9月13日 共同体研究会で野本三吉さんが「日本人と神道」というテーマで話す。

9月14日～17日 第10回キブツ研修生の合宿が山梨県の金峰農場を会場におこなわれる。二四名の研修生が参加。

制作後記

■直接購読(入会)のすすめ

この雑誌は主に定期的な直接購読者(キブツ会会員)によって支えられています。1年間(12号)の会費は入会金(200円)とも2,000円。申込みは、現金書留か振替で、氏名、住所、生年月日、職業など書いて、送って下さい。

■月刊キブツ取扱書店

東京=新宿紀伊国屋、神田東京堂、模索舎、ユニタ書店、国分寺アヴァン書房、駒場書店
京都=京都書院 札幌=富貴堂、北大生協、アテネ駅前店 仙台=八重州書房 盛岡=第一書房 福岡=九大生協 名古屋=おばた文庫 富山=清明堂 松本=遠兵ブックセンタ

■印刷所=創土社 東京都港区芝5-16-13 電話 455-2421(代表)

「月刊キブツ」 1972年10月号(通巻103号)

頒価 150円 送料16円(1年間2,000円)

東京都渋谷区代々木4-5-14 参宮橋ハイ

ツ10号 日本協同体協会

電話 370-2813 振替・東京 24403

▽現在の社会で能力が劣るとき、差別と抑圧の下にとじこめられている。現在の社会福祉と呼ばれるものも、抑圧の一形式であると思わされることもしばしばである。無数の生命たちが、本来の力を開花できずにしなび

てしまっている。見せかけの物質的繁栄ではなく、すべての生命たちがノビノビと共に繁栄し合ってゆくにはどうしたらよいのか。ぼくらは途方にくれながらも模索をつづけざるをえない。▽矢追日聖氏の文章を読んでいると、心や体を固くせずにこの課題に立ち向かってゆく力が湧いてくる。また、C・モア氏たちの活動にも希望が湧く。 哲